

研究報告

彭叔守仙年譜稿(下)

今泉淑夫

天文十九年(一五五〇)庚戌、六十一歳。

正月一日、近江田上ニ於テ「鶏旦偶作」一詩アリ。「猶」(上)

正月五日、東福寺永明院用叔ヨリ書簡ト潤体田二丸及ビ唐律一章ヲ寄セラル、韻ヲ和シテ一詩返礼ス。「猶」(上)

三月二十二日、コノ頃、近江惠雲寺ニ移居ス。春暉ヨリ梅花寒ニ二種ヲ贈ラレ、一詩アリ。「題江之新居惠雲寺」ノ記事アリ。「猶」(上)

四月五日、光厳ノタメニ「意釣齋記」ヲ製ス。署名ニ「前南禅彭叔山人 拜草平江之惠雲境界」トアリ。「猶」(中)

四月十八日、コレヨリ先四月十五日、正安大姉死去ス、追悼ノ偈ヲ製シテ田上法泉庵主ニ呈ス。「鉄」(下)

五月四日、室町幕府征夷大將軍足利義晴、是ヨリ先春、夢窓ノ塔ヲ拝シテ禅門ニ入ル、コノ日、近江穴太ニ薨ズ、万松院殿贈一品左相府曄山道照居士ト諡ス。「足利系図」「東福寺誌」

五月、梅霖守龍ニ命ジテ『出家受戒略儀』ヲ書写セシメ、善恵軒常什トナス。署名「江左金華山慧雲寺比丘前南禅彭叔守仙六十一齡」。コノ書、後ニ大機軒ニ移ル。(寛永二十年四月二十三日条)「受戒略儀」(東福寺靈雲院蔵)

五月、殊伯勝公寿像ニ著賛ス。「鉄」(上)

五月、安芸田満寺元嘉蔵主、コレヨリ先天文十七年秋冬ノ交ニ栗棘庵ニ

掛錫ス、「惟慶字銘」ヲ製シテ与フ。「猶」(下)

五月、月溪英広(桂昌門派、景南英文ノ嗣)ノ門弟穆公少年、先ニ東昇芳叔ニ惟春ノ号ヲ与ヘラル、需メニヨリ「惟春号銘」ヲ製ス。署名ニ「書於江之惠雲境界」トアリ。「猶」(下)

コノ頃、惠雲寺ニ於テ「狗子掩土」偈アリ。「下火拈香」

閏五月(五月イ)二十六日、能登定林寺前住鶴天崇翰(栗棘門派、以三崇伊ノ嗣)、去年十月四日示寂ス、虎伯、書簡ヲ以テ伝フト雖モ、今年

正月中辭ニ至リテ初メテソノ訃ヲ知ル、一偈ヲ製シテ追悼ス。マタ下火法語ヲ製ス。「下火拈香」ニ「天文庚戌閏夏五念六前南禅彭叔退衲拜書于江左」トアリ。「鉄酸餹」下ニ「天文庚戌夏五」トノミアリ。「鉄」

(下)「下火拈香」

六月二十七日、彭叔ノ嗣梅霖守龍、本寺ヨリ東福寺領周防得地保等ノ年貢収納ヲ命ゼラル、九月二日、出京、同十九日、備前比々島傍ニ於テ海

賊ト合戦、二十八日、山口着、二十九日、毛利氏館ニ赴キ、本寺ヨリノ書状及ビ物ヲ贈ル、十月四日、陶氏館ニ赴キ、物ヲ贈ル、十一月、当地

高山寺竹英西堂ト田布施年貢ノ事ヲ併セテ収納ノ件ヲ相議ス、時ニ天龍寺策彦周良、天文十六年、大内義隆ノ命ニヨリテ明ニ渡リ、コノ年六

月、遣明使ノ任ヲ了リ山口ニ留リテ帰洛セズ、陶氏ノ崇敬ヲ受ク、介シテ種々便宜ヲ得タリ、翌年二月、得地保三所都合百三十石皆済、三月十

四日、上洛ノ途ニツキ、四月十四日、和泉堺港ニ着ク、十八日、帰洛、東福寺栗棘庵ニ到着、翌日、諸老ニ報告、返簡・音物・年貢錢五十七貫七百六十二文ヲ會計ニ呈ス。(↓天文二十一年夏条)「棘林志 列伝」(二、大機開基梅霖龍禪師)「東福寺誌」

八月、安芸定恵寺寿桂藏主ノ需メニ応ジテ、ソノ師前真如寺汝宗寿超(栗棘門派、仙岳寿泰ノ嗣)肖像ニ著賛ス。(↓天文二十年九月条、天文二十一年正月条)「鉄」(上)「鹿苑院公文帳」

九月六日、玉英春公禪定門三十三回忌ニアタリ、一偈ヲ製ス。コノ頃、近江ヨリ戻リ東福寺ニ在ルカ、「山野、頃在洛之惠峯、不赴其会、以為遺憾矣」ノ記事アリ。「猶」(下)

十月、コノ前後、能登七尾城ニ於テ有力被官遊佐統光一派ト畠山義統・温井総貞トノ対立激化、翌年三月マテ交戦シ、同二月二十八日、畠山義統落髪、法名徳祐、同三月一日、交戦終結、同七日、温井総貞等重臣落髪ス、以後、「畠山七人衆」(温井総貞(紹春)・遊佐統光・長統連・三宅総広・平総知・伊丹総堅・遊佐宗円)体制成ル。「羽咋市史 中世・社寺編」「東四柳史明」戦国期の能登畠山氏と五山叢林塔頭「北陸史学」第二六号

天文二十年(一五五二)辛亥、六十二歳。

正月、献甫光璞(永明門派、希雲慧沢ノ嗣)、永明下正光庵作舟侍者ノ試筆和詩ヲ示ス、応ジテ二詩ヲ製ス。署名「無價野釈守仙」。「猶」(上)二月十五日、東福寺第十三住。「彭叔和尚法語」

三月十四日、鶴童子アリ、随侍シテ須臾モ左右ヲ離レザルコト四五年、去年春、出家ヲ望ムト雖モ、今年結制ノ日ヲ期シ因循トシテ果サズ、楞嚴神呪ヲ学バシメ法華経ヲ誦誦セシムニ、勤ムルコト精ナリ、今年二月下泮、俄ニ病ニ臥シ、医ニ命ジテ治セシムルモ、三月八日、終ニ易簀セリ、忠且ツ直ニシテ、僅カニ十六歳ナリ、哀惜痛傷恆ニ倍ス、戒名性

法、華称伝岸ト名ツケ、上坐ニ転位セシム、コノ日、初七日諱辰ヲ営ミ、栗棘庵ニ安牌ス、津送ニ臨ミ一偈ヲ誦スルモ猶ホ是レ歎タリ、重ネテ禪詩一章ヲ製シテ攀慕ノ懐ヲ述ブ。「鉄」(下)

三月、豊陽ノ僧若川、東福寺ニ掛錫シテ年アリ、去年結制ニ乗払ヲ遂グ、コノ月帰郷ニ際シテ、一偈ヲ製シテ餞行ス。「猶」(上)

四月二十八日、亡友太虚玄冲(龍吟門派、明室玄亮ノ嗣)ノ十七年忌ニアタル、一偈ヲ製シテ追悼ス。「鉄」(下)

四月二十八日、大徳寺九十四世特賜大智仏勝禪師天啓宗歎、コノ日、能登ニ於テ示寂ス、享年六十六。後日、大徳寺興臨院ニ赴キ焼香、頂相ヲ拜ス、像右ニ遺偈アリ、諸老ト共ニ一偈ヲ呈ス。署名「栗棘野釈守仙」。「鉄」(下)「龍宝山大徳禪寺世譜」

五月九日、一女子アリテコノ日俄ニ死去ス、ソノ夫戒名ヲ需ム、恵生ト名ツケ、恵生禪尼四大字ヲ書シテ一偈ヲ付シ、供養トス。「鉄」(下)

五月二十三日、能登畠山七人衆、畠山義統ト共ニ連署シテ、大徳寺興臨院(畠山義総菩提寺)ニ鳳至郡諸丘ノ地ヲ寄進ス。「羽咋市史 中世・社寺編」「東四柳前掲論文」

五月、宗栄女ノタメニ、「華深字偈」ヲ製シテ与フ。「鉄」(上)

五月、城南光台寺宗舜ノタメニ、「聖庵字偈」ヲ製シテ与フ。「鉄」(上)六月下泮、熙春龍喜(龍吟門派、天覚宗綱ノ嗣)、去年七月、出京シテ下野足利学校ニ赴ク途中、越中大家庄ニ在リ、ソノ十一月書信ノ詩、コノ月ニ到リテ読ム、重ネテ前韻ニ攀リテ一偈ヲ奉答ス。(↓天文二十二年春条)「猶」(上)「骨董集」「今泉」熙春龍喜書状について「東京大学史料編纂所報」第十七号

七月、出羽大浦瑞光寺等原座元ノタメニ、「青叟字偈」ヲ製シテ与フ。「鉄」(上)七月、安芸定恵寺惠繁藏主ノタメニ、「惟盛字偈」ヲ製シテ与フ。「鉄」(上)

八月、丹後保津仏性寺僧麟察ノタメニ、庵号耕春、字号明室ト名ツケ、字偈ヲ与フ。「鉄」(上)

九月一日、周防大内義隆、陶隆房(晴賢)ニ襲ハレ、山口ヲ出奔シテ、長門大寧寺ニ自害ス。(↓天文十五年三月二日条)

九月、安芸定恵寺寿桂藏主、華号ヲ需ム、コノ月、「月峯字銘」ヲ製シテ与フ。(↓天文十九年八月条)「猶」(下)

十月十二日、コノ年十二月十二日、周防高山寺開山基山賢仙(大覚派、無隠円範ノ嗣)ニ百年遠忌ニアタル、コノ日、預修アリ、住持竹英元龍(栗棘門派、龜溪元智ノ嗣)ニ代リテ香語偈ヲ製ス。「鉄」(下)「今枝愛真」『中世禅宗史の研究』第二章第一節

十月下浣、天翁永幸(永明門派、清溪永廉ノ嗣)、一室ヲ構ヘテ齋銘ヲ需ム、啜松斎三太字ヲ書シ、齋銘并序ヲ製シテ呈ス。「猶」(下)

冬至、天翁永幸ノ門弟騶少年ノタメニ、梅陽字偈ヲ製シテ与フ。「鉄」(上)

十一月、兄弟ニアタル丹陽桃葉庵祖印彭首座、僧童ヨリ自悦守懔ニ侍シテ年アリ、先ニ自悦ニヨリ祖印号ヲ与ヘラレシモ字説ナシ、因リテソノ需メニヨリ銘文ヲ製ス。「猶」(下)

十二月八日、東福寺第十四住。「彭叔和尚法語」

コノ年、献甫光璞ノタメニ、住肥前高城寺山門疏ヲ製ス。「猶」(下)

コノ年マデニ、「増禅林集句韻」成ルカ。(↓天文十一年九月条、天文十八年十二月十四日条)「新日本古典文学大系 庭訓往来 句双紙(早苗 憲生解説)」

天文二十一年(一五五二)壬子、六十三歳。

正月九日、「春初携友登金剛山」ノ詩アリ。「鉄」(下)

正月十一日、毛利隆元、戒名華称ヲ需ム、応ジテ華溪常栄ト名ツケ、「華溪号銘」ヲ製ス。「猶」(下)

正月中泮、安芸定恵寺月峯寿桂藏主、上洛シテ東福寺ニ掛錫シ、学業ニ励ムコト三年、コノ春帰郷ヲ告グ、一偈ヲ製シテ餞行ス。(↓天文十九年八月条、天文二十年九月条)「猶」(上)

正月、安芸定恵寺僧惠作首座ノタメニ文仲字偈、同寿彭藏主(栗棘門派、汝宗寿超ノ嗣)ノタメニ「惟仙字偈」ヲ製ス。「鉄」(上)

正月、安芸高仙寺惠宰首座ノタメニ茂叔ニ大字及ビ字偈ヲ書シテ与フ。署名「前南禅見東福彭叔山人守仙書于無價室」。(↓天文二十四年二月条)「鉄」(上)

正月、大徳寺惟春侍者、建仁寺玉峯少年試筆ニ次韻ス。「猶」(上)

三月一日、香叔ノ帰郷ニ際シテ、一偈ヲ製シ餞行ス。「猶」(上)

三月六日、春沢永恩(仏国派、九峰以成ノ嗣)ノタメニ、住建仁寺諸山疏ヲ製ス。「猶」(下)「鹿苑院公文帳」

四月、竺雲慧心首座(三聖門派、允芳慧菊ノ嗣)、去年七月、出雲ヨリ上洛シテ善惠軒ニ掛錫ス、今年結制ニ乗弘ヲ遂グ、帰郷ニ際シテ一偈ヲ贈ル。(↓天文二十一年九月条)「猶」(上)

五月十四日、伊陽ノ天章憲藏主、去年、善惠軒ニ掛錫ス、コノ日、帰去ニ際シテ一偈ヲ贈ル。「猶」(上)

五月、能登ノ僧岱侍者(幻住派、如月寿印ノ嗣)ノ需メニ応ジテ、「東峯字偈」ヲ製シテ与フ。「鉄」(上)

六月二十六日、伊賀極楽寺雲岑普公、コノ年三月二十四日示寂ス、コノ日、訃ヲ聞キテ梅霖守龍、設齋賦偈ス、韻ヲ和シテ一偈ヲ製ス。「鉄」(下)「東福寺誌」

六月晦日、伊州白圭麟藏主、今年四月中旬、善惠軒ニ掛錫ス、ソノ帰郷ニ際シテ一偈ヲ製シテ餞行ス。署名「東福山人彭叔」。「猶」(上)

六月、能登虎伯禅翁、上洛シテ東福寺ニ自悦守懔ノ塔所不二庵怡雲軒ヲ拜ス、翌日、能登七尾ニ帰ルニアタリ、如月寿印ニ餞行ノ詩アリ、韻ヲ

和シテ別離ヲ惜シム。「虎伯禪翁者我門白眉也、構釣山華軒於登州之七尾山、而幽居者、殆乎二十二寒暑矣」ノ記事アリ。(↓天文九年条)

〔猶〕(上)

夏、策彦周良、明ヨリ帰国シテ周防ニ留マルコト三年ニ及ブ、洛社ノ普宿詩ヲ以テ帰洛ヲ促ス、之ニ效フ。(↓天文十九年六月二十七日条)

〔猶〕(上)

七月十五日、東福寺第十五住。「彭叔和尚法語」

七月十五日、正璉首座(聖一派、悦林慈柏ノ嗣)、書ヲ寄セテ雅稱ヲ需ム、応ジテ「珍叟号銘」ヲ製シテ与フ。署名「前南禅見東福彭叔退衲守仙書于善惠境界」。「猶」(下)

八月晦日、自牧斎主般兄ノ需メニ応ジテ、自悦守憚頂相ニ著賛ス。署名「前南禅嗣法小師比丘彭叔守仙拜讚」(「画像」賛ニ「小師比丘」ナシ)。(↓永正十七年十二月一日条)「鉄」(上)「守仙賛守憚画像」(東福寺靈雲院蔵)「大日本史料」(第九編之十一)

八月、虎伯老禪ノタメニ「釣山軒記」ヲ製ス、「我法兄虎伯老禪、丁享祿重光単闕之年(辛卯、四年)、避騷屑入登州、偶受先太守興臨院殿(畠山義総)知、而寓居七尾之山腰、而築一斗室、自号釣山、予聽斯称、不解釣于山之義、天文九歳之春、辞洛赴登、依先太守命、借釣山之小窓、已閱半稔矣、繇此、行住坐臥、遊目四簷、則号之初疑冰消也、其地在山之半巔、而屏風崎、世良志、松百、涌浦、石崎、彼境此境、(略)魴鱖鯉鯿、凭欄可釣焉、蓋老禪心、在乎隱、不在乎魚」ノ記事アリ。

(↓天文九年条)「猶」(中)

八月、能登太守三世股肱ノ臣井上総英公、剃髮染衣、戒名紹英、書斎ヲ梅龍ト名ツク、ソノ友釣山軒主、上洛ノ次ニ齋銘ヲ需ム、応ジテ「梅龍齋銘」ヲ製ス。「猶」(下)

九月二十日、梅霖守龍、彭叔ノ頂相ヲ描キテ賛ヲ需ム、之ニ応ズ、「生

則出神家、咸謂樽桑全俊、在信州本貫於諏方廟」ノ文言アリ、署名「善惠老人六十三載自題」。「鉄」(上)

九月、興禅寺竹英元龍、ソノ母玉崖妙球大姉ノタメニ号偈ヲ需ム、応ジテ一偈ヲ製ス。「鉄」(上)

九月、竹英元龍ノ需メニ応ジ、ソノ師龜溪元智(栗棘門派、文溪元作ノ嗣)ノタメニ「龜溪号銘」ヲ製ス。(↓天文二十年十月十二日条)「猶」(下)

九月、竺雲慧心首座ノ需メニ応ジ、字説ヲ製シテ与フ。(↓天文二十一年四月条)「鉄」(上)「竺雲字説」(長門日頼寺蔵)

十月二十六日、梅霖守龍ノタメニ、「未雲斎記」ヲ製ス。「猶」(中)

十月、建仁寺栖芳院付庸近江小幡宝祥庵主湘筠中江ノタメニ、字偈ヲ製ス。「鉄」(上)

十一月、宇治長老母妙善大姉ノタメニ「芳鄰字偈」ヲ製ス。「鉄」(上)

十二月二日、東福寺藕絲軒主文餘令緒座元(栗棘門派、太虚祥廓ノ嗣)示寂ス、追悼一偈ヲ製ス。(↓天文二十三年十二月二日条)「鉄」(下)

十二月晦日、東福寺第十六住。「彭叔和尚法語」

十二月、梅谷首座(大幡派梅谷元保カ)ノ書写加筆セル「聚分韻略」ニ跋ヲ記ス。署名「二林守仙書」。「猶」(中)

天文二十二年(一五五三)癸丑、六十四歳。

正月二日、「鉄笛散兵」ノ詩アリ。「鉄」(下)

正月、東福寺桂昌庵附庸石見那賀郡龍門寺ノ僧惠祐首座、去年十月、上洛シテ桂昌庵ニ寓ス、ソノ需メニ応ジテ「徳右字偈」を与フ。マタソノ

婦郷ニ際シ、一詩ヲ製シテ餞行ス。「鉄」(上)「猶」(上)

正月、石見邑智郡平等寺中興開基桂佐首座ノタメニ、「梅庵字偈」ヲ製シテ与フ。「鉄」(上)

正月、石見邑智郡普明寺主桂鼎首座ノタメニ、「惟三字偈」ヲ製シテ与
フ。署名「前南禅見東福彭叔叟守仙於無價軒下書之」。「猶」(下)
正月、周防法泉寺主春芳、族ハ陶氏ニ出ツ、先ニ建仁寺ニ掛錫、帰郷ニ
及ビ詩ヲ以テ贖セシコトアリ、去年冬再ビ上洛、ソノ帰駕ヲ送ルニ一詩
ヲ以テス。「猶」(上)
閏正月十二日、一笑斎舜祇ノタメニ「金山石記」ヲ製ス。署名「前南禅
彭叔叟於善惠軒記焉」。「猶」(中)
閏正月十九日、自讚ヲ製ス。署名「南禅前任東福十六住彭叔退衲守仙六
十四載於善惠軒下讚焉」。「鉄」(上)
同日、侍童ノ需ニ応ジテ自像ニ賛ヲ加フ。署名「南禅前任東福十六住彭
叔守仙六十四載書于善惠室」。「鉄」(上)
同日、近江惠雲寺性椅喝食ノタメニ自像ニ賛ヲ加フ。「鉄」(上)
二月十日、小師以清善規ノ需メニ応ジテ自像ニ賛ヲ加フ。冒頭ニ「其本
貫也地在洛陽、其族譜也廟曰諷方」ノ記事アリ。署名「南禅前任東福十
六住彭叔守仙」。(↓天文二十二年春条)「鉄」(上)
二月、梅谷首座、自賦詩百章ノ批点ヲ需ム、四十二絶ヲ批シテ還シ、跋
ヲ記ス。「猶」(中)
三月六日、コノ月三日、清翁能泉法橋寂ス、コノ日、一偈ヲ製シテ溢溪
首座ニ呈ス。「鉄」(下)
三月二十二日、東福寺第二百五世高岳令松(三聖門派、作成令偉ノ嗣)、
去年三月二十二日示寂ス、ソノ嗣汝源令見、一周忌斎ヲ営ム、第二百八
世住持香仲見橋ノ追悼偈韻尾ニ歩シテ、一章ヲ製ス。「鉄」(下)
三月、周悦首座(仏国派夢窓下、天龍寺第百八十八世樂甫等傳ノ嗣)、
是ヨリ先ニ、天用真薫(夢窓下、天龍寺第百八十三世)ヨリ字号栢岫ヲ
与ヘラル、ソノ需メニヨリ「栢岫字說」ヲ製ス。署名「南禅前任東福十
六住彭叔退衲守仙書于善惠軒下」。「猶」(中)

春、彭叔、先ニ天文十六年五月、能登ニ赴キ崇壽寺ニ寓セシ時、以清蔵
主近侍ス、帰京ニ随ヒ入洛シテ彭叔ニ從フコト六年、コノ春、帰郷ヲ告
グ、一詩ヲ製シテ餞行ス。(↓天文十六年五月条、天文二十二年二月十
日条)「猶」(上)
春、是ヨリ先天文十九年七月、下野足利学校ニ赴キシ熙春龍喜ニ詩ヲ贈
リテ帰京ヲ促ス。(↓天文二十年六月下浣条、天文二十四年条)「猶」
(上)「今泉」熙春龍喜書状について「今泉」足利学校学徒表稿「日
本歴史」第四二八号
五月、景麟令徐(聖一派、省伯令慧ノ嗣)ノタメニ住肥前円福寺山門疏
ヲ製ス。「猶」(下)「鹿苑院公文帳」
五月、三聖門派全少年(蘭圃光秀ノ嗣)ノタメニ「玉川字說」ヲ製シテ
与フ。署名「前南禅彭叔退衲守仙拜草」。「猶」(中)
五月、永明門派沼沼少年ノタメニ吳溪ト立号ス、ソノ師春蘭永遠首座ノ需
メニ応ジテ「吳溪字說」ヲ製シテ与フ。署名「前南禅彭叔叟守仙書于善
惠境界」。「猶」(中)
六月二十四日、近江養徳庵源喜少年、今年四月、東福寺桂昌庵ニ掛錫
ス、需メニ応ジテ「笑岳字偈」ヲ製シテ与フ。「鉄」(上)
六月、近江慈泉庵主見譽首座ノタメニ、「芳苑字偈」ヲ製シテ与フ。「鉄
(上)」
六月、近江香玉庵主見春首座ノタメニ、「花溪字偈」を製シテ与フ。
「鉄」(上)
(是月カ)、近江正法庵主蔵首座ノ小師慶寿、師ノタメニ雅号ヲ需ム、応
ジテ「雲松字偈」ヲ製シテ与フ。「鉄」(上)
七月十五日、東福寺第十七住。「彭叔和尚法語」
七月、近江白東庵主玄育首座ノ需メニ応ジテ、「養室字偈」ヲ製シテ与
フ。「鉄」(上)

七月、近江瑞龍庵聖智首座、書ヲ致シテ雅号ヲ需ム、応ジテ「文溪字
偈」ヲ製シテ与フ。「鉄」(上)

七月、東福寺楞嚴庵附庸石見東光寺ノ長玉藏主、去年秋、上洛シテ莊嚴
藏院ニ掛錫ス、需メニ応ジテ「月岑」ニ大字ト字偈ヲ与フ。署名「前南
禪見東福彭叔退衲守仙書于善惠軒下」。マタソノ帰郷ニ際シ、一詩ヲ以
テ餞行ス。「猶」(上)(下)

八月二十九日、是ヨリ先、天文十四年八月二十九日、相国寺僧心岳承忠
首座示寂ス、ソノ小師麟甫功藏主、師像ヲ描キテ贊ヲ需ム、コノ日、応
ジテ之著贊ス。署名「前南禪見東福彭叔退衲守仙拝讚」。「鉄」(上)

九月一日、麟甫功藏主、頃日、彭叔ニ近侍シテ学習ス、ソノ需メニ応ジ
テ自像ニ著贊ス。署名「善惠老人彭叔守仙書于東福笏室」。「鉄」(上)

九月二十九日、竺雲慧心ノ小師惠哉侍者、東福寺海藏院ニ掛錫シテ三
年、帰郷ニ際シテ華称ヲ需ム、「祥岸字偈」ヲ製シテ与フ。(↓天文二十
一年九月条)「鉄」(上)

九月二十九日、石見聚泉寺文溪老禪(莊嚴門派、勝剛長柔ノ法孫)ノ小
師殊芳首座ノタメニ、「檀溪字偈」ヲ製シテ与フ。「鉄」(上)

十月五日、東福寺第十八住。「彭叔和尚法語」
冬至後一日、三聖寺好春利因首座(三聖門派、東曜利寅ノ法孫)ニ乘扨
上堂謝語ヲ与フ。「彭叔和尚法語」

天文二十三年(一五五四) 甲寅、六十五歳。
正月十八日、明年ノ春正宗統大姉七周忌ニ先立チ、コノ日忌齋ヲ営ム、
香燭ヲ製ス。「下火拈香」

正月、茂叔惠宰西堂、栗棘庵輪次ヲ勤ム、祝シテ「新年賀出世」ノ偈ア
リ。「鉄」(下)

三月、天龍寺周隣藏主(夢窓下地藏門派、叔和中康ノ嗣)、江心承董
(夢窓下三秀門派、竹岩寿貞ノ嗣)ニヨリ立号セラル、周隣ノタメニ

「琛甫字説」ヲ製ス。署名「前南禪彭叔退衲守仙書于善惠境界」。「猶」
(中)

三月、東山來迎院主天覺長惟、院ノ東北ニ小室ヲ構フ、ソノ需メニ応ジ
テ「良齋記」ヲ製ス。署名「書于惠日之善惠軒、前南禪彭叔退衲守仙、
時年六十有五」。「猶」(中)

四月、近江養徳門下源智藏主ノ需メニ応ジテ才叔ト名ツケ、「才叔字偈」
ヲ製ス。「鉄」(上)

五月二十九日、月溪空公居士(進藤河内守長久)卒ス、葬儀ニ赴ク次ニ
一偈ヲ製シテ悼ム。「鉄」(下)

七月八日、後慈眼院殿九条尚經二十五年忌ニアタリ、和泉南宗寺堂上和
尚ノ追悼偈韻ヲ和シテ一偈ヲ呈ス。署名「東福彭叔退衲守仙拜和」。
「鉄」(下)

七月十五日、東福寺第十九住。「彭叔和尚法語」
七月十五日、伊予安樂寺住持龍公、曾テ足利学校ニ赴キテ字ビ、近年、
東福寺海藏院ニ掛錫ス、需メニ応ジテ、乾室ト名ツケ、ニ大字ト字銘ヲ
製シテ与フ。署名「前南禪見東福彭叔退衲守仙謾草」。「猶」(下)「今泉
「足利学校字徒表稿」

七月十六日、長谷川奇峯珍公ノ永寿童女早逝ス、母祖母性泉ノ需メニ応
ジテ、童女像ニ著贊ス。署名「前南禪見東福彭叔守仙」(↓天文二十三
年八月条)「鉄」(上)

八月二十八日、三条西実隆、曾テ僧惠珍ノタメニ齋号ヲ如奇ト名ツク、
需メニ応ジテ「如奇齋記」ヲ製ス。署名「前南禪見東福彭叔守仙、時年
六十五」。(↓天文六年十月三日条)「猶」(中)

八月、莊嚴門派乾峰土曇ノ後胤日向大光寺(十刹)ニ元昶首座ノ需メニ応
ジテ光峯ト名ツケ、「光峯字偈」ヲ製ス。「鉄」(上)

八月、長谷川奇峯珍公ノ継室祖母性泉信女ノ需メニ応ジテ、祖母ニ大字

ト字偈ヲ製ス。署名「前南禅見東福彭叔退衲守仙書于善惠軒下」。(↓天文二十三年七月十六日条)〔鉄〕(上)

八月、和泉ノ僧秀英見俊藏主(聖一派、香仲見橋ノ嗣)ノ需メニ応ジテ、「秀英字銘」ヲ製シテ与フ。

九月六日、十年前ニ戒名ヲ授ケシ性慶大姉ノ需メニ応ジテ、昨日、喜雲ト名ツク、字偈ヲ製シテ与フ。〔鉄〕(上)

九月二十一日、東福寺第二十住。〔彭叔和尚法語〕

九月二十一日、コレヨリ先、九月九日、東福寺第二百八世香仲見橋(聖一派、惟精見進ノ嗣)示寂ス、コノ日、追悼偈ヲ製ス、マタ人ニ代リテ一偈ヲ製ス。〔彭叔和尚法語〕〔鉄〕(下)〔鹿苑院公文帳〕

九月二十三日、丹後守芳園淨春禪定門卒ス、享年六十四、頃年師檀ノ好アリ、哀惜ニ堪エズ、一偈ヲ製シテ追悼ス。〔鉄〕(下)

冬至、龍岳良真首座(永明門派、綱宗宗揚ノ嗣)ニ乗上上堂謝語ヲ与フ。(↓天文二十四年是年条)〔鉄〕(中)〔彭叔和尚法語〕

十二月一日、東福寺第二十一住。〔彭叔和尚法語〕

十二月二日、文餘令緒座元ノ三周忌ニアタリ、小師錦叔慧緒侍者忌齋ヲ営ム、一偈ヲ呈ス。(↓天文二十一年十二月二日条)〔鉄〕(下)

十二月五日、元綱上坐ノタメニ「倚竹齋記」ヲ製ス。署名「前南禅見東福彭叔退衲守仙、時年六十有五」。〔猶〕(中)

十二月十二日、春深信公禪定門卒ス、一偈ヲ製シテ悼ム。〔鉄〕(下)

十二月、コノ頃、能登畠山七人衆再ビ分裂シ、遊佐統光、加賀門徒等ノ支援ヲ得テ温井・長氏等畠山軍ト合戦ス、二十八日、遊佐氏敗ル。〔羽支市史 中世・社寺編〕

天文二十四年(一五五五)(弘治元年、十月二十三日改元)乙卯、六十六歳。

正月、誠叔少年、去年夏、出雲ヨリ上洛シテ東福寺ニ掛籍ス、ソノ試筆

ノ韻ヲ和シテ一詩ヲ贈ル。(↓天文二十四年四月十六日条)〔猶〕(上)

二月十五日、東福寺第二十二住。〔彭叔和尚法語〕

二月、安芸高仙寺住持茂叔惠宰、東福寺栗棘庵ニ掛錫スルコト四年、帰郷ニ際シテ送行詩ヲ製シテ贈ル。(↓天文二十一年正月条、天文二十三年正月条)〔猶〕(上)〔鉄〕(下)

三月十七日、東福寺永明院楼下会ニ於イテ代作「惜花」詩アリ。〔猶〕(上)

三月、石見東光寺住持汝舜長栢、三年前ヨリ上洛シテ、竹田瑞竹斎定加ニ医术ヲ学ブ、因リテ書齋ヲ如竹斎ト名ツク、ソノ帰郷ニ際シテ一詩ヲ以テ餞行ス。〔猶〕(上)

三月、美作真応寺僧渚月賢応、人ヲ介シテ字偈ヲ需ム、応ジテ二大字ト偈ヲ与フ。〔鉄〕(上)

三月、美作神仙寺僧粧建首座、書ヲ致シテ字号を需ム、応ジテ安溪ト名ツケ、二大字ト字偈ヲ与フ。〔鉄〕(上)

春、石見ノ僧惟三桂鼎首座、去年天文二十三年冬至上堂ニ問禪ヲ勤ム、コノ春俄ニ帰郷ヲ告グ、一詩ヲ以テ餞行ス。(↓天文二十一年閏正月条)〔猶〕(上)

春、「蔵裡春草」ノ詩アリ。〔鉄〕(下)

四月十六日、広徳老師、去年夏、伯耆ヨリ上洛シテ官寺ニ入ル、誠叔少年、之ニ随ヒ、コノ年四月、東福寺正覚庵ニ於イテ剃髮ス、コノ日、老師ノ韻ヲ和シテ一偈ヲ呈ス。(↓天文二十四年正月条)〔鉄〕(下)

四月、近江慈泉庵ノ尼僧見仁藏主ノ需メニ応ジテ、麟仲ト名ツケ、字偈ヲ与フ。〔鉄〕(上)

六月、天瑞榮嘉首座ノタメニ、住薩摩大願寺山門疏ヲ製ス。〔猶〕(下)

〔鹿苑院公文帳〕

七月八日、連署シテ常楽庵施食嚙金ノ制ヲ定ム。〔東福寺誌〕〔東福寺文

書之二

七月、近江興源寺門下大用禪師ノ末裔元義藏主、人ヲ介シテ雅号ヲ需ム、一雲ト名ツケ、二大字ト字偈ヲ与フ。「鉄」(上)

十月五日、東福寺第二十四住。「彭叔和尚法語」

コノ年、熙春龍喜、下野足利学校ヨリ帰京ス、彭叔、先ニ上野長楽寺住持東高義豪及ヒ学校第七世座主九華(玉岡瑞璵)ヨリ贈ラレシ詩ノ韻ヲ和シテ、関東下向ノ僧ニ託ス。(↓天文六年三月条、天文二十一年春条)「猶」(上)「清溪稿」「骨董集」「今泉」熙春龍喜書状について」

コノ年、龍岳良真首座、東福寺ノ「祭羅漢文」ヲ修補ス、之ニ跋ヲ加フ。(↓天文二十三年冬至条)「猶」(中)

十月十二日、示寂。享年六十六。天瑞守選「棘林志」列伝(一)、善慧開基彭叔仙禪師)ニ、ソノ生涯ヲ要約シテ「大永享祿之際、邦騒乱置書籍、師親贍写内外典暨史記數百卷、自嬉日典籍、夜以繼晨、卒以道德文章為東福二百七代、一香供自悅、復移南禪」トアリ、ソノ東福寺二十四住ニ及ブ経営実績ニ比シテモ、典籍手沢ノ量ヲ特筆シタルモノナリ。(↓天文二十一年九月二十日条)「東福寺誌」「扶桑五山記」「東福寺諸塔頭并十刹諸山略伝」「玉村彭叔論考」

永祿十年(一五六七)丁卯

五月、某、先ニ周仙ノ自悅守懌ヨリ講義ヲ受ケシ『大施餓鬼抄』ヲ、周仙秘本ヲ以テ贍写ス。(↓永正十年九月七日条)「大施餓鬼抄」(東福寺靈雲院藏)

元和三年(一六一七)丁巳

七月、彭叔、先ニ畠山義総ノタメニ「古文真宝」五冊ヲ抄ス、コノ月、集雲守藤(栗棘門派、桂庵守広ノ嗣)、松平利光ノ命ニ依リ之ヲ贍写シテ上呈ス。「集雲和尚遺稿」(上)

寛永二十年(一六四三)癸未

四月二十三日、阿波名東郡僧南陽守春(集雲守藤ノ嗣)、先ニ彭叔ノ梅霖守龍ニ命ジテ書写セシメタル『出家受戒略儀』ヲ善恵軒ニ於テ書写ス。(↓天文十九年五月条)「受戒略儀」(東福寺靈雲院藏)

天和二年(一六八二)壬戌

三月、南陽守春、先ニ彭叔ノ夢窓派慶岩等雲ヨリ相伝セシ戒法ヲ自誓受戒ス。(↓永正十四年五月十四日条)「受戒略儀」(東福寺靈雲院藏)

元禄六年(一六九三)癸酉

七月十七日、南陽守春ノ嗣月潭守亮、大永七年十二月末ヨリ翌八年二月ニカケテ守仙ノ書写セシ清原業忠講「論語抄」三冊ヲ修補ス。「岩崎文庫貴重書書誌解題I」

元文四年(一七三九)己未

五月十二日、碧天守沼(莊嚴門派、千溪守仍ノ嗣)、成就院運庵玄籙所藏ノ棠隱玄召書写本ニヨリ「彭叔和尚法語」ヲ書写ス。「彭叔和尚法語」(書写奥書)

享和二年(一八〇二)壬戌

秋、彭叔自筆ノ鉄酸餈三卷、猶如昨夢三卷、朽敗シテ將ニ烏有二婦セントス、善恵軒主大淳慧活座元(莊嚴門派、不二庵玉嶺守瑛四世孫)、之ヲ修補シテ、不二庵天瑞守選(玉嶺法嗣)ノ識語ヲ需ム、天瑞、寛政七年(一七九五)・享和三年ニ、第八十九・九十三世トシテ対馬以酈庵輪番ヲ勤ム、再任任期滿了後、文化四年(一八〇七)、東福寺白雪軒ニ一華庵ヲ造立ス、白雪軒ハ栗棘門派太虚祥廓ノ開基、一華庵ハ栗棘門派東漸健易ノ開基ニカカル、当時廃絶ノ同庵ヲ中興シタルナリ、享和元年五月、「二華開祖東漸和尚小伝」一卷ヲ著シ、享和三年秋、対馬ニ於イテ「二華東漸和尚龍石葉」ヲ修補ス、天瑞ノ東漸及ヒ彭叔ニ対スル敬意ソノ著述ニ散見シテ、彭叔自筆本六卷修補ノ記念ニ適フナリ。「鉄」(下)、

冊尾識語「棘林志」〔今泉「韜之惠鳳小考訂正」『日本歴史』第四一四号〕

(補一) 元禄六年七月十七日条は、先の本稿(上)の成稿以後に気づいた。併せて大永七年・八年条を補うべきものである。『岩崎文庫貴重書書誌解題I』(東洋文庫日本研究委員会編、平成二年五月)によれば、本書には「大永八戊子二月朔於普門丈室書之瓢山人卅九齡／五十七丁」(論語第二尾題下)、「大永八戊子二月十二於普門丈室書之瓢山人卅九齡／四十八丁」(第四末)、「大永七丁亥臘之廿六於普門瓢山人書之卅八歳／四十九丁」(第六末)、「大永八戊子春二月十九於普門丈室記焉瓢山人卅九齡」(第十一末)、「大永八戊子王正二十二日於普門室書之瓢山人卅九齡／廿丁」(尾題下)の書写奥書があり、巻末に「元禄第六癸酉初秋十七日 守亮修補之」の識語がある(同書三二頁)。

(補二) 『善慧軒集書目録』は、すでに引用したように、彭叔の書写本あるいは所蔵本で善慧軒に襲蔵された典籍が中心となり、その没後に同軒の所蔵に入ったものも含まれている。本稿では識語など年記のあるもの、ないしは年次の推測できる記事によって立項した。守仙の書入れがあり、その蔵書であったことがわかるものでも年記のないものは割愛した。表紙に「瓢庵」墨書のある『大慧普覺禪師宗門武庫』古写本一冊、「彭叔」印のある『碧巖録抄』古写本十卷六冊、「守仙」印のある釈印成撰『聯芳集抄』古写本十卷十二冊、「周仙」蔵書印があつてその改名以前に蔵書に入つたことが分かる古写本『老子経』二冊、ほかに彭叔の師自悦守憚が明応九年四月十八日書写した『建中靖国統灯録』三十卷十冊、自悦手写『補庵稿』六冊等がそれにあたる。

これらは彭叔の修学を知る上で記憶されるべき記事である。また『鉄酸餡』『猶如昨夢』についても、年次の明記がなくて年譜本文に収める

ことができなかつた記事が少なくない。これらを正しく補うことができなれば、年譜の各年次の事跡と人脈等はさらに豊かなものになるはずのものである。後日の課題である。

(補三) 寺院・各地機関の蔵書書目等に彭叔関係の史料が見えることも少なくない。これらについても後日補われるべきである。たとえば『大東急記念文庫善本書目』に、

『感山雲臥紀談』(宋曉瑩、南北朝刊五山版)(永正七年彭叔自筆書入本) 二冊

『仏法大明録』(圭堂、明建文元刊)(天文十一年彭叔手校本) 四冊

『月和尚語録』(元正印著、妙心編、南北朝刊、兪良甫、五山版)

(大永八年彭叔自筆書入本) 二冊

『蒲室集』(笑隱、元刊)(天文三年彭叔自筆書入本) 十冊

のあることが知られている。また川瀬一馬『五山版の研究』によれば、

『円覚略疏注経』(東洋文庫蔵、「善慧軒」旧蔵、彭叔自筆書入本) 二冊

『雲谷和尚語録』(積翠軒文庫蔵、南北朝刊五山版、天文十三年彭叔識語) 一冊

『開福寧禪師語録』(成實堂文庫蔵、天文七年彭叔識語)

『虚堂和尚語録』(尊経閣文庫蔵、彭叔旧蔵) 改装四冊

『五灯会元』(大東急記念文庫蔵、二本ノ内一本永正十四年彭叔朱点)

二十冊

『首楞嚴義疏注経』(国立公文書館内閣文庫蔵、二本ノ内一本「守仙」

印記、彭叔自筆書入本) 十二冊

『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』(東洋文庫蔵、「彭叔」印記、大永六年彭

叔自筆識語) 五冊

『大慧普覺禪師普説』(大東急記念文庫蔵、彭叔自筆書入本) 四冊

『大東急記念文庫蔵、彭叔自筆書入本) 四冊

『大光明藏』(大東急記念文庫蔵、靈雲院旧蔵、彭叔自筆書入本) 三冊
『入天寶鑑』(谷村文庫蔵、永正十四年彭叔墨書識語) 四冊
『仏鑑禪師語録』(積翠軒文庫蔵、二本ノ内一本永正八年彭叔手識) 三冊

『夢窓国師年譜』(天理図書館蔵、彭叔自筆書入本) 一冊

『林間録並林間後録』(国立国会図書館蔵、永正七年彭叔識語) 二冊
などのあることが示されている。これらの中には各機関の書目に掲載されてやや詳細に内容の推測できるものもあり、漏れているものもある。すでに「年譜稿(上)」に収めた分もあるが、逸した分は後日補うべきものである。すでに本文に掲げたものと併せて彭叔手沢本の多量と分野の広さを告げている。

彭叔没後のある時期に、善恵軒の蒐書が散逸する危機のあったことを語る記事がある。『棘林志 列伝』(二、善恵二世笑隱禪師)に、「師諱善禪、号咲隱、五辻宰相之子、九条殿下仮为己之子、俾其投善恵出家、其名以善字者賜御諱偏也、壮歳住善恵、歴列刹、為東福二百十六世、一香供彭叔、天正十四年丙戌五月二十二日寂」とあり、その後「附」として、「笑隱示化、其徒珍首座縦酒不法、竟婦俗而盜善恵之書數十篋、出奔浪華、不二集雲遣人反其書於善恵、又使西岩周西堂(長州隆景寺開基、時在不二会中)久看護善恵寺事」と見える。

時勢の混乱が寺内に及んだのもあり、近江の人で、後に東福寺二百二十三世・南禅寺を歴住し、「為人敏捷而大度、道望文学傾都鄙」と評された集雲守藤(元和七年七月六日寂)によって、その難を免れたのである。戦乱と世相の混乱に蔵書の維持が容易でなかったことを知る例である。

(補四) 川瀬一馬『続日本書誌学之研究』に、中華民国故宫博物館蔵「唐才子伝」十卷二冊には「善恵軒」蔵印があり、彭叔以前の「文安己巳

(一四四九) 六月十八日申刻於瑞松西窓朱点終」の巻末書入れがあること(一〇〇五頁)、中華民国国立中央図書館蔵『正平版論語(無跋本)』五帖の各帖首に「善恵軒」「守仙」蔵印のあること(一〇〇九頁)が報告されている。これらは同時代もしくは後年に何らかの事情で日本から流出したものと考えられる。

(補五) 書籍は、同一寺院の内部のみならず、はるか遠方にまでその軌跡が及んだことを示すことがある。一冊の現存はその周辺にあったはずの修学的影響を示唆し、書写識語によって知識と学の移動において複雑な事情があったことを知る場合も少なくない。典籍は内容のほかにも、成立の動機と後に付加された二次的情報についても注目すべきである。これらの豊かな素材を処理するために、彭叔の場合にも工夫されるべきことは多い。

彭叔関係の典籍にかぎっても、近代になって愛書家の間をくりかえし移動したことを複数の蔵書印は語っている。近世以前の移動は学としての内容を伴ったが、近代以後の移動は学をすでに離れて、古書愛好の世界に属したかもしれない。近代以後の人々は、なぜ、たとえば彭叔有縁の書籍に関心を示したのか。「彭叔加點」ないしはその手沢本であることが古典籍の価値を増幅するとして、その所以は何処にあるか。愛書家の間を転々とした現象の背後にあったはずのものについてのことである。彭叔伝記研究の前提としての年譜作成は、永正―天文期を中心とする叢林の実態と、禅林の学芸活動を知るための基礎作業であるが、やがていまは敢えて言及されることがなく漠然としている学僧に対する敬意のよって来るところ、典籍における「彭叔加點」が注目されるべき理由があらためて問われなければならないだろう。

年譜にみたように、彭叔の周辺には、東福寺を中心として、全国的な規模において、門派をこえる多数の僧が交渉する修学回路が存在した。

制度として確立されないが、遠近の人脈によって機能した回路である。この回路の細部を確かめるのはひとつの課題である。また能登畠山氏とその家臣たちとの交渉について、武家の側に信仰と学芸素養の期待があり、寺僧の側にも教線を維持し拡張しながら寺領保持の支援を期待する側面があった。この事情の細部についても注意を向けるべきであろう。時代はつねにそれぞれの聖俗世界を持ち、その内容の微妙な差異と変化の軌跡が歴史とよぶべきものにあたる。(了)

〔付録〕 彭叔守仙關係略法系圖





